

# 大東ふれふれ帳

(11)

## 河内木綿の思い出

秋風がさやさやと野面をわたるころ、木綿(きわた)にまつ白い花が咲き、やがて田んぼが色づき始めると、その実がはせて、中から綿菓子のような綿が、無数の黒い種子を抱いて現われます。

後、旧河床地は見渡す限り棉畑となりました。

いった名が多いのは、親が娘にねがいをかけて付けたものでしょうか。

春、一面の菜の花で黄色く染まる河内野も、秋には木綿の実の清楚な白で埋まるのです。そして、カラリカラリと糸を紡(つむ)ぐ音や、パタンパタンと機織りの音が、夜ごとの家からも聞かれたといえます。

後、旧河床地は見渡す限り棉畑となりました。

私の実家は、大阪東横堀で二百年続いた油屋でした。水車によって綿実や菜種から油を絞り、滓(かす)は肥料になります。古い取引帳に、この辺のお家の名前が多く見られます。しかし、外綿の輸入が自由化された明治三十年ごろから、綿の生産は急激にすたれ、棉畑の消滅と共に実家も没落しました。

現在の大東からは、想像もできない風景ですが、元祿のころから幕末まで三百年余、綿作りはこの地方の農家にとって、稲作に次ぐ重要な商品だったので、大和川付け替え工事の

「昔はええとこの嫁さんでも機織りしたものです。『河内女の木綿一日一疋織り』というて、機織りの上手な事が嫁の条件でした」との古老の言葉に、女たちの苦勞と働きぶりがしのばれます。「いと」「ぬい」と

長持の中には奉公人が着ていた縞の着物・前だれ・はつぴ等が、たんと入っていたし、屋号を染め抜いた暖簾(のれん)は、うこんの風呂敷に包んでありました。重たげな布団もみんな河内木綿でした。「派手になっ

たから……」と母にもらった菊柄の浴衣も、配色の美しい千筋縞の袴(あわせ)もずっと箆筒(たんす)にあったのに……。今は何一つ手もとにありません。でも、ゴワゴワした布団の手ざわりや、着物の柄、暖簾の思い出と共に、見たはずもないのに、白く咲き広がる棉畑の風景が、遠い昔の額縁の中に鮮やかによみがえるのです。最近、木綿のよさが見直されたのか、若者のフアツ

用雑貨その他、綿製品は街にあふれています。強くて吸湿性に優れ、手ざわりのよい素材が人々に好まれるのでしょうか。それにしても、私たちの祖先が生み育てた手織の素晴らしい河内木綿は、今さら求めようもないだけに、失った宝の価値にぼうぜんとするのは、それを知っている世代だからでしょうか。

文・酒井昭子



河内の綿の花(綿が吹いたところ)